
I with...

戯言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I
w
i
t
h
·
·
·

【Zマーク】

Z
O
R
D

【作者名】

戯
言

【あらすじ】

人間なんて、生きている意味などない・・・。そんな事を心に秘めて生きてきた高校生、宮内龍也。しかし、ある日突然来た転校生に出会い、生きる意味を探し、苦悩し、見つけだす・・・。そんな感じの物語。でもコメディ。

プロローグ

皆、何のために生きてるんだろ？。

俺は時々考える。

だってそうだからつ。

皆、明日の暇をどう潰すかを考えるのに必死だ。

目的が無いのならさつと死ねばいいのに・・・。

ま、こんな事を思っている俺も、たいして生きる意味なんて無いんだけれど・・・。

そり、俺に生きる意味は無い。

プロローグ（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

間違いなどは見逃してくださいませ・・・。

初心者ですが、将来の夢は小説家なので、感想ができるだけお願いします。自分の間違いなどを研究したいお年頃なのです。

Chapter 1・転校生

「あ～、お前ら席につけー。今日から新学期なんだから休みボケを治して、気合入れろー！」

やかましく怒鳴りながら先生が教室に入つてくる。

いまどき怒鳴つて生徒が着いてくると思つてゐるのだらうか。だつたらお笑いだな。俺だつたら転校生が来たとでも嘘をついて・。

「あ～、そういえば今日転校生が来てるんだつたな。」

・・・えつ。

「しかも女の子だぞ。」

うおおおおおおおー！

クラス中ではじゅぎままくつていた男子が叫び声をあげて踊りながら席につく。

まったくなんなんだこいつ等は・・・。

「おー、入ってきてこいぞ。」

教室に遠慮がちの女の子がはいつてきた。

背が低めでショートカットの活潑そうなかんじの顔立ちだ。ちなみに結構可愛い。

「おおおおおおおおおおー！」「」

クラスの男子が叫び声をあげる（例外 僕）

転校生はかなり引いている。

まったく何なんだこいつ等はいやマジで……。

「う、うん、じゃあ自己紹介して。」

「な、棗雪音です。得意なことはスポーツです。

早く学校になれたいので、よろしくおねがいします！」

いつたい何をどうお願ひするのか分からぬ自己紹介だったが、緊張しているみたいなので多めに見てやるか。
いや、別に俺が多目に見たって関係ないけどね？

「さて、じゃあ席は・・・富内の隣だな。色々教えてもらひや。」

はい、と返事をして、俺、富内龍也の隣の席に座る。

「よろしくねー。」

棗は俺に向かつてそいつたが、俺はそいつに一瞥をくれただけで無視をする。
俺の無視が不満だったようすで、あの手この手で俺を喋らじようとする。

「ねえ、君の名前は？」

「・・・。」

「誕生日は？」

「・・・」

「好きなタイプは？」

「・・・」

「なんで黙つてるの？」

「・・・」

「反応しないつぬ〜。」

「・・・」

「あつー！あんな所にヒツヨガ！」

「・・・」

「コノ野郎う・・・！」

轟はついに我慢の限界きたみたいで先生の話しち中なにもかかわらず引きついた笑顔で立ち上がり、

「名前くらい名乗りやがれえ！――

俺の首をじめた。

「うわ、ヤベえ、この間はマジだ。殺す気だ！」

「ぐまつー。」

俺はギブアップの意思表示に俺の首をしめていた野獣の腕をバシバシ叩いた。

「お、名乗る気になつた？」

「吉乃富蔵三郎。」

俺は咳き込みながらこたえる。

「今時そんな名前の高校生がいてたまるか……！」

全国の高校生の吉乃富蔵さんめんなさい……。

また首をしめよいつとある棲をなだめて本当の名前を聞いた。

「富内龍也。」

「それが君の名前だよね？」

「ああ。」

「よし、じゃあメアドと携帯番号教えてー。」

「ヤダ。」

「答える。」

突然棲の田が剣呑な物になる。

「わかつたよ……。」

俺が、メアードと携帯番号を書いた紙を橐に渡す。

「よしーこれで友達ねー。」

「お前、何か怖いよ・・・。」

「どうよ?シンデレラを図描してるんだー。」

いや、お前はシンデラだと思ったが、あえて黙つておいた。

新学期早々ついついへくなつたな・・・。

Chapter 1・転校生（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

間違いは見逃しくださいませ。

感想宜しくお願ひします。

Chapter 2：放課後（前書き）

前回の更新より一ヶ月も遅れてしましました。
すいません！

Chapter 2：放課後

その日は始業式だけで終わり、待ちに待つた放課後。
いや、別に待つてないけど。

「あれ？ひとりでかかるの？」

「ああ、俺あ、友達少ないからな」

「じゃ、一緒に帰るかよう！」

「ムリ」

「えへへ、なんですよ？」

「めんどいかひ」

「どうせ帰る方向違うだろ」しつこい。

「えー、いい喫茶店見つけたのに・・・」

「わかった。じゃ、じゃんけんに勝ったらいつてやるよ

「おつけー、勝つてやるぜ・・・！」

結果、・・・惨敗・・・。

大喜びしている雪音の横で後ろに縦線がたくさん見えるくらうにつながっている俺、というのが三分後の俺たちの情景だった。

「うわ、こじるーーー。」

「ああ・・・」

一緒に教室を出る。

学校から出て雪音の後についていく。

向かった先は商店街にあるちよつとショーカードな喫茶店。

「私、お金持つてないから、おじつてチヨーダイー。」

「は、はあー?」

「私、お金今もつてないんだって。だから・・・おじつてー。」

何故に金を持つてないのに俺を誘つたんだ!?
もしかしてこいつ最初から・・・?

「うそ、おじつてもうひつもひつだつた」

「の悪女め・・・。

「やうなら話は別だ。俺はつこて来るだけのつもりだった。なのこ、
おじれだと?そんなの嫌に決まつてんだ!」

「ううー、せつかいいい店見つけたのに・・・」

「知らん知らん。今度別の奴と来るんだな」

「うう、べすん・・・。べ、どりしてもだめ・・・?」

う・・・一瞬音が田に涙を溜めて、田をひぬひぬせながらじりじり見てる・・・。

畜生！

「だ～～、もう一分かつた分かつた！今回だけな！」

「やつたーありがとー！龍ちゃん大好きー。」

りゅ、龍ちゃん？

「うん、龍ちゃん！だつて宮内くんとか龍也さんとかつて呼んで、他人行儀な呼び方、嫌なんだもん」

「いや、だからこいつになりあだねー・・・。どんな一足飛ばしだよ」

「嫌なの？」

「べ、別に嫌ではないけどー・・・。」

「ま、でもやんなに叫ぶない、龍也くんつけて呼ぶ事にある」

「ま、まあ、それなり・・・。」

「じゃ、中入るーつゆ・ひ・や・くーー。」

「お、お！」

俺たちが中に入らうとするとい、

「ああ～～！龍也先輩です～～！」

どこか懶<うつ>りやうな、おつとつした女の子の声。振り返ると、同じ高校の一年、春野躊躇<はるのつらじゆが、シシユしてへるといふだった。

いついちに向かってBダ

Chapter 2：放課後（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

あまり更新できなくてすいませんでした！

期末テストとか色々あつたもんで・・・。

努力はしますが、次も遅くなるかもしれません・・・。

できれば一週間に一回くらいのペースで更新したいんですけどねえ。

感想、意見、どしどし送つていただけると、うれしいなあ・・・？

Chapter 3・後輩（前書き）

少し遅くなつてしましましたが、ちゃんと投稿できました。間に合つた・・・よね？

Chapter 3・後輩

「ああ～～！龍也先輩です～～！」

後輩の一年、春野躊躇が一いちに全力ダッシュしてきて、

「・・・ふみつ！」

もうちよつとで俺たちに届くといひで豪快にすつてんじりつんした。

「くうう～、痛いんです～～・・・」

顔面から転んだらしい、鼻が真っ赤になつている。

「う、・・・えつぐつ・・・」

「「・・・。」」

30秒程しゃがんだままえぐえぐっていたが、いきなり立ち上がりつて、

「龍也先輩ですか～～！」

登場シーンと同じ言葉を発する。

「先輩、偶然ですね～、こんな所で会つなんて～！」

「嘘吐け」

実はこいつ、学校から出るときから俺たちを尾行してきていたのだが、その尾行があまりにもお粗末な尾行だつたので、追つてきているのを見つけたあともほつといただけだ。

「な、何故にバレたんですかあ～！？」

分かる、普通に分かる。あんなに何度も後ろで転ばれたらな……。

「ま、別にいいんですう。とりあえず、隣にいる女の人は誰ですかあ～！」

「転校」「彼女」

俺が転校生と言おつとしたひ、雪音が遮るように彼女と言いやがった。

「か、彼女・・・！」

「いや、違うから」

「ううう～～！龍也先輩は私のものなんですう～～！」

躊躇がとんでもない」と言い始めた。

「私と龍也先輩は一夜を共にしたなかなんですう～～！」

「一夜つてなんだよ・・・。大体彼女じやないから

躊躇は心底驚いたような顔をして、

「え？ 違かったんですかあ～？」

「違げーよ」

「よかつたですう～、てつきり龍也先輩が私のものじゃなくなつた
と思つたですう～」

「俺はお前のものになつた覚えもないけれどな

「はい、ヤシモド～」

俺と躊躇の会話を遮つて雪音が割つて入つてきた。

「龍也君はあたしと喫茶店に来る約束をしてたんだから、君は帰つ
てくれない？ てか帰れ」

「りゅ、龍也先輩の浮氣発覚ですう～！」

「俺、お前と付き合つてないから」

「いいから帰れ！」

雪音の顔が般若になつてる・・・。

「うひ・・・、くひひううう、ひう、ひうー。」

躊躇が泣きながら走り去つていった・・・。
哀れだ・・・。

「さ、邪魔者は消えた！ 入る！」

「あ、おひ・・・」

「こいつ怖えー・・・。怒らせたらどうなるか・・・。

喫茶店に入つて奥の方の窓側の席につく。

「ああー、なに頼もつかなかー?」

雪音がメニューをじっと見てくる。

「決めた! 店員さん! 」

店員がやつけてくる。

「(注文お決まりでしょ)つか?」

「これ下さこー! 」

雪音がメニューの一部分を指差す。

「かしこまつました」

「俺はコーヒーを」

「かしこまつました」

そつ言つて奥の方に入つていった。

「お前何頼んだの？」

「えっとね～、ウルトラスペシャルギガントダイナマイツエクセル
ントパフェ！」

「は？」

なんすかそのどんでもない名前のパフェ！？

「それ、めっちゃ嫌な予感する・・・」

「大丈夫大丈夫！」

その根拠は何処からくるんだか・・・。

「あ、来たよ！」

「・・・げ」

案の定、それはドでかいパフェだつた。
まるでエッフェル塔のような・・・。

「それ、何人分だ・・・？」

「えっと、五人分だつて」

「いくらあるんだ・・・？」

「えとえと、4980円」

・・・。

俺のお金・・・。

俺のお金、どこへ行つてしまつのですか・・・?

「いただきまーす!」

雪音が食べ始める。

10分後。

早々に雪音がギブアップし、残りを俺が必死で片付けていた。
残すと2000円プラスされるらしい・・・。

・・・・・

「おいしかったね!」

「ああ・・・。」

俺はあれから必死でパフェを平らげ、今死にそうになつてゐる。

「大丈夫?」

「もう無理・・・。」

「今日、夕飯いらぬー。」

「だめだよう、お母さんのつくつた御飯ちゃんと食べないと」

「あ？俺親いないから」

「……え？」

「いや、小さいころに死んじまってな。親戚の所に預けられてたんだけど、高校にあがる時に親戚の家出てきて一人暮らしあげたんだ」

「へえ、じゃ、あたしと回りじゃん！」

「へ？」

「あたしも親いないんだ。ま、だから引っ越ししてきたんだけど……」

「ふーん、いつも親いないんだ……。

「やつか、龍也君も親いないんだ。じゃあ、今口は『親ない龍也君の家にお泊りにこっちはやおー！』

「は？」

「ここつたり言つてんだ。

「やつと決まれば、龍也君の家に」e-t-s 90-.

「お、おいー！」

「一体なんの『記念だよ……。

Chapter 3・後輩（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

前回の投稿よりもちょっとだけ早く投稿できました。

次はもっと早く投稿できるように努力します。

なぜか、今学期の反省、的なあとがきになってしまってきました。
このままだと訳のわからないことを書いてしまいそうなので、この辺で・・・。

次回でお会いしましょー。感想よろしくお願ひします。

「へえ、龍也君も結構大変な人生おくつてるんだね」

「ま、な

あれから本当に俺の家に遊びに来た雪音は、俺の身の上話が聞きた
いと駄々をこねた。

本当は思い出してしまうから言いたくはなかつたんだけど、あまり
にもうるさかつたから、特別に聞かせつてやつた。

・・・・・

「俺の両親は、俺が三歳の時に死んだ。家に強盗が入つたんだ。茶
の間でテレビを見ていた両親を殺し、箪笥の中に入つていた現金十
万円と通帳を持つて逃げた。俺は犯人の氣まぐれで命拾いした」

「その犯人は捕まつたの？」

「いや、まだ捕まつてない」

「なんだ、それで？」

「ああ、そんで俺はまあ、親戚の家に引き取られる事になつたんだけど、後はまあ、定番つていうか、まったく、やつかい物を残して死んでもれたもんだ、的な感じで暴力つけたりメシ食わせてもらえなかつたり」

「へえ、そんな事やる人いるんだね。・・・大人なのに」

「そうだよな、俺もびっくりだつたぜ」

「それで、その後は？」

「あ？えっと、高校あがる時に、あんたもう高校生なんだから一人暮らしくらいできるでしょ？みたいなトンデモねえこと言われて、金はやるから出て行けって言われて、両親の保険金と通帳渡されて、このマンションに引っ越してきたんだ」

「あれ？でもわざわざ通帳盗られたって言つてたじちゃん？」

「なにそれ」

「だから、盗られた方は少ししか入つてないニセモノで、ちゃんと預金されてた方は違う所に隠してあつたんだよ」

「何処に？」

「仏壇の裏」

「なるほど」

そんなことを話して今に至る。

「じゃあさ、なんでお前は親死んじましたんだ？」

「火事よ、火事。放火だつて」

「ふーん」

「いつも大変だな。

「ねえ」

「あ？」

「龍也君はさ、その両親を殺した相手を憎んでる？」

「いや、別に。そんな、人を殺すような奴低レベルで話になんないし、両親だって別に死んだつてこの世に未練があるわけではないだろ。そもそも、人間なんてなんで生きてんのかさえ分からない」

「え？」

・・・・・

「だつてそうだろ？皆明日の暇を潰す事ばっかり考へてるような奴じゃないか。そんな奴等、生きてる意味なんてないんだよ」

俺は長年体内に収めてきた気持ちを外に吐き出す。

「俺にしたつてそうだ。何をするでもなく、ただ何となく日々を生きてる。俺だつて生きてる意味のない人間だよ。人を幸せにする事がつてできないし、なにか夢があるわけでもない」

「・・・まつたく、皆死ねばいいのに」

「・・・龍也君」

永い沈黙。

「・・・生きる意味を探すために生きてる、つていうんじゃ、ダメかな・・・？」

「・・・あ？」

「生きる意味の話だよ。確かに今は、龍也君には何もないかもしない。でも、その何かを見つけるために、今を生きてるんじゃないのかな」

「・・・ああ」

「多分、何もしてなさそうに見えたり、必死に暇を潰そうとしてる人でも、人生っていう道の上では生きる意味を探してバタバタもがいてるんだよ。今は自分には何もないけど、将来、絶対に何か大切

な、かけがえのないものを見つけてやるんだーってさ

「。。。。」

「だから龍也君も、一生懸命足掻いてる人を、死ねば言になんて言つちやダメだよ?」

「返事は?」

「お、おう

「よひしー

そつか。

今は何もなくても、必ず何かが見つかる。
ちょつと希望を持った気がするな。

「だから、学校でも、いつまでもむすつとしてないで、積極的に明るく振舞うこと」

「それはヤダ」

「なんどよ?」

「あいつらは人の事を勝手に怖がりやがる。怒つてもいないのに、俺の顔色をうかがつて教室の外に逃げていく

「龍也君がいつも仮面してるからでしょ。君が二コ二コ笑つてればきっと友達になってくれる」

「・・・」

「小鳥たちは君の肩に止まりたがっているの、チャンスが見つから
ないだけで」

「そか」

「やうな」

なるほどね。

「・・・ちよっとしんみりした空気になっちゃったなー。でもだい
じょーぶー夜はこれからーあ、飲むぞーー！」

「おいつ、俺らまだ未成年・・・・」

夜はふけていった。

Chapter 4：部屋（後書き）

乱筆乱文に失礼。

すいません！遅れました。

二週間に一話だなんて、僕の嘘つき！

次こそはもつと早く・・・！

感想よろしくお願いします。

ちゅん・・・ちゅん。

穏やかな小鳥の声で目が覚めた。

— 九三 —

ああ、こんなに気分のいい目覚めは久しぶりだ・・・。
ふと、自分の寝てたベッドの横に目をやる。

布団にわざかなふくらみ。
これはもしや・・・?

「ふう」

「おお幸せそう布団に包まっている雪音がいた。

一九四九年十一月

卷之三

寝ててNの壁にベジエから号を譲られた。

「……………？」

昨日俺の部屋に押し入ってきたヤツは、いろいろ深い話をした後、しんみりしちやつたとか言って、びっくりするくらいアルコールを摂取し、倒れるようにソファで眠ってしまったんだった。俺は寝てこる雪音に毛布をかけ自分はベッドで寝たんだった。それがどうして俺のベッドで……。

「・・・」

ふと時計を見る。

針は十一時三十七分をさしていた。

さいわい今日は学校もなく、寝ても良い時間だったので俺は少し安心する。

とつあえず、雪音を起さなければ……。

「おこ

「・・・」

「お起きな

「・・・」
「・・・」

俺は無言で布団のふくらみに蹴りを入れた。

布団のふくらみは、女のトライからぬ悲鳴をあげてベッドから転げ落ちた。

「げふうー。」

ふつ、恐ろしい値段のパフュを奢りされた復讐だ・・・。

「ハハハハハハハハ・・・。」

・・・。

布団の中から地獄の奥底から湧き上がり湧き上がるよつなかみ声が・・・。

「蹴つた奴あ誰だ〜・・・。」

「ハハ〜！」

布団の中から手が出てきて俺の手をしつかり掴んでいく。
普通に怖ええ・・・。

「蹴つた奴あ・・・、誰だ〜・。」

「死や〜〜〜！」

ベッドの中に潜み住んでいる魔物が俺に襲い掛かってきた！

「・・・んう？龍也君？龍也君が蹴つたの？」

「す、すいませんでした！」

「じゃあ許す。おやすみ〜

「おやすみ、じゃなくて一起きり〜。」

「なんでお〜？今日は学校休みじゃん

「ん、そつだなじわ

「じゅ、ここでしょ。おやすみ

「だめだ。お前は昨日ソファで寝ていたはずだ。なのになんで俺のベッドに寝ているんだ。その理由を聞かせてもういたら寝かせてやる」

「ふえへ、めんどい

「じゅ起きる」

俺は雪音が包まっている布団を引き剥がしてかかる。

「分かった分かったーーーいつからあたしかり布団を奪わないでーーー」

「じゅあ早く言え」

・ · · · ·

雪音の話によると、夜中に田を覚ました雪音は自分がソファに寝ていて、俺がベッドに寝ているのを見て、何であたしがソファなのにーーーみたいな心境になり、腹が立つて俺が寝ているベッドに侵入ってきて一緒に寝ていたのだといつ。
· · ·

自分勝手過ぎだろそれ。

「そもそも、レディをソファに寝かせて自分はぬくべとベッドで寝ていて罪悪感を感じないのー?」

「へ、それは・・・。」

でもなあ。

雪音だしなあ・・・。

「きみ、今失礼なこと考えてない?」

「別に」

「ならいいけど」

「・・・。」

「ところが、今日はあたしの買い物に付き合つてもらいまーす」

「な、なんで俺がー?」

「ここの高貴なあたしをソファに寝かせたから」

話がつながつてねえー!

「じや、準備しなきゃ」

むくじと起き上がる雪音。

その格好は・・・!

「し、下着！？」

「え、・・・きやつ！」

なんでこいつ下着姿で寝てたんだ？

「あたしの服・・・、ど二？」

「知るかー！」

俺、下着姿の奴と一緒に寝てたんだ・・・。

「見たね・・・？」

「『めんなさい』・・・。」

「責任、とつてね・・・？」

知らねーよ。

「今日は、スーパーワルトラスペシャルエキセントリックケーキお^びつてもいらっしゃんだから

「もう嫌だー！」

今日一日も長くなりそうだった。

Chapter 5 : 部屋 2 (後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

こ、今日はいつもより早かつたですよね・・・?
これだけの文章でも結構時間かかるんですね・・・。

Chapter 6・ショッピング

「せつかべの休日なの・・・。」

俺は今、雪菴の買ひ物に付き合つてゐる。

「せつかべの休日なの・・・。」

「なんで家で寝てられないんだ――――！」

「ほひ、速く歩け荷物持ち！ 一日は短いんだぞーー。」

「なんで俺はお前に良つけづて使われてるんだよー。」

「え？ それは、君が寝てるわたしを蹴つて起しあやつたからだよ？」

「それはやうだが・・・。」

「お前自分勝手すぎ・・・。」

「寝てゐるわたしを起した罪は重いんだよー。」

それはお前が勝手に俺のベッドに入ってきたから・・・。

「自業自得だつていいでしょ？」

「当たり前だ――。」

俺に悪い要素はほとんど無いぞー。

「なに言つてゐるの? そもそも君がわたしをないがしろにしたのが悪いんじやないかあ」

「知るか、んなもん」

「ま、そんな事はどうでもいいんだナビ」

「いつするにこいつは荷物持ちが欲しかっただけなんだな・・・。

「いや、それだナジやなによっ。」

「じゃあなんだってんだ」

「奢つてくれる人を探してたんだよお」

俺から言わせれば同じようなもんだけだ。

「よし、じゃあ今日のメインイベントー昨日行つた喫茶店ででつかいケーキを食べよー!」

もちろん経費は・・・、

「龍也くん持つけねー。」

やつぱりな・・・。

「セヒ、れつひーーー。」

「あああああああああああああつー龍也先輩はつけんですうーーー！」

つるさい後輩が道の向こうから駆けてくる。

「體せんぱぐつー！」

思いつきり口けた。

痛そうに打つた鼻を搔りながら、左へ右へと来る

こいつ、学習能力ないのか？

「龍也せんぱい、いたいですよう」

確実に俺のせいじゃない！

「だつてえへ、龍也先輩があたしに振り向いてくれないからあ・・・

それだつて、俺のせいぢやないぢやないか・・・。

「はうあつ！あたしつてそんなに魅力なかつたんですかあ・・・？」

「おい、一人で勝手にどんよりモードのんじやねえよ」

「ちよつと、またわたしと龍也くんの甘ーい時間を邪魔しに来たの？」

?

雪音が躊躇を睨み付ける。

「違いますよう、あたしはただ龍也先輩について回る意地汚いドロボー猫を追い払いにきただけですよ？」

「へえ・・・、いい度胸じゃない」

おお、二人の視線の真ん中くらいで火花的なものが散っているのが分かる。

こ、これは怖い・・・。

「まつててくださいねえ？龍也先輩。今この邪魔な女を引き裂いてみせますう。龍也先輩はあたしだけを見ていればいいんですよ？」

ヤ、ヤンデレ・・・！

「ふん、かかってきなさい！」

「いくですようう？・・・きええええつ！」

「やめろ、恥ずかしいから」

「「え？」」

道のど真ん中で火花を散らすこいつらのおかげで、目立つでしょうがない。

しかもこいつらの喧嘩の原因が俺の奪い合いだからな。

「本当に俺の事を思ってくれているなら、今すぐ田から出している火花を收めて少し落ち着け」

「はいっ、今すぐやめます～」

「しょ、しょうがないなあ・・・。やめてあげるよ。でも、龍也くんのためじゃないんだからねー。しょうがなくなんだからねー。」

「まあひらシノテレやつてもお前のキャラはそれ以上拡がんねえよ。

「別に」こいつがいてもいいだろ? ディッセ俺が奢る事は決定事項なんだしな」

ていうか、俺今自分で、俺が奢る事は決定事項とかいつもった。なんという奴隸根性。なんといつヒモつぱり・・・。

「・・・もへ、しょうがないな・・・。チツ、せっかく龍也くんと一人つきつで『デート』だと思つたのに・・・。」

「ん?なんか言つたか?」

「ううん、なんにも?」

「ならいいけど」

やれやれ、今度はどんなとんでもないもの奢らされたんだろうな。

Chapter 6・ショッピング（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

今日、奇跡的にパソコンがつきました！
けど、ホントに奇跡的なのでやっぱり更新またできなくなると思いま
す・・・まだ新しいの買いつ予定もないでの、次の更新は、奇跡
的についたときです。

それまでまた待っていてください！

ChapteR-・・・ハッピーハック (漫書セ)

いのじるの懸念が多いです。

Chapter 7・ショッピング2

「は～っ！ 食べた食べた！」

「おいしかったですう・・・！」

「うう・・・、つぶ・・・。」

俺たちはあの後皆で喫茶店に入り、約束どおりトンデモないケーキを奢られた。

案の定、こいつらは途中でへばり残り半分以上残っていたケーキを俺が完食。

だいたいなんで三人でケーキを1ホール食べようと思つんだろうな・・・。

しかも、大きさがとんでもなかつた。

まるで樹齢千年以上の大木の丸太のようだった。

俺、よく頑張つた・・・！

「先輩、大丈夫ですかあ～？」

躊躇が心配顔でこちらを覗き込んでくる。

「も、もうダメかもしれん・・・。」

頭の中がぐらぐらする・・・。

俺、死ぬのかな・・・？

「大丈夫よ、だつて龍也君だし」

俺だから大丈夫なのか?
なんの根拠もねえな。

「そうですねえ、龍也先輩ですもんねえ」

「納得するなよ」

ここからは一体何様のつもりなんだよ。
だんだん腹が立ってきたぞ。

「でも、奢ってくれて、ほんとにありがとうございましたあ」

「いや、別にいいや」

「でも、あんなに高かつたのに……。」

そう、あのケーキはパフェ以上に高かつた。
その値段、なんと7000円。
財布の中身が危なかつた。

「そういえば、龍也君つてアルバイトとかしてるの?」

「いや、何にもしてねえけど」

「じゃあ、お金の出所はどう?」

「死んだ両親が残した金」

「へえ?幾らくらい?あんの?」

「五億」

「はあ…? なんでそんなに稼いでんのよ、君の両親」

「知らん、宝くじでも当たったんじゃないのか」

「でも、そんなにあるならむしと繋つてくれてもいいよね…」

「お、お前、まだ俺に奢らせる気か…。」

罰当たりな奴め…。

大体、俺は今日の手持ちの金は尽きたぞ。

「冗談だよ、嘘嘘」

お前のは冗談に聞こえない。

「でもお、先輩って結構お金持ちだったんですねえ」

「まあな」

「びっくりしましたあ…。先輩と結婚すれば一氣にお金持ちになれる…。好きな人といっしょに居られて、なおかつお金もがつぽり…。きやうーん! 薔薇色人生ですう!」

「な、何をいきなり叫んでるんだ! びっくりするな…。」

「やつよ! 大体龍也君はわたしのものなんだからね!」

「・・・。」

俺は誰のものでもねえよ。

「そつてと、疲れたしさうそろ帰るかー。」

「ああ・・・。」

やつと一人になれる・・・。

「じゃあ、龍也君の家に?」

「れつ・つ・』ーですうー!」

「・・・は?」

「こつら今向を言つた・・・?」

「はやく、龍也君ー置いてくよ?」

「おいつ、ひとの家に向勝手に・・・!」

やれやれ、まだ俺には安らぎが来ないみたいだ・・・。

Chapter 7・ショッピング（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

この「」、パソコンのつく確立が少し上がった気がします。
ちゃんと時間を守つて投稿できるので嬉しい限りです。

このまま直ってくれるといいんですけどね…。

では、また次の話でお会いしましょー。

Chapter 8・部屋（前書き）

すこません、こつもよつ更新遅かつた気が・・・。

「はい、龍也君…あんして？」

「ダメですう～！先輩はあたしが食べさせてあげるんですう～！」

・・・。

俺は一人で食える・・・。

「龍也君…早く口開けてよ～」

「ほりほり先輩、あ～んですよひう～？」

「・・・・」

「　　」「う？」

「ひるせえええ―――」

俺は怒鳴る。

この状態だ、怒らんほつがおかしい。

「さやあー龍也君が怒鳴った！」

「くうう～・・・。怖いですう・・・。」

「お前等、ひるせええぞー！メシぐらい一人で食えるんだから少し静かにしてうー。」

「は、はい。」

ふう。

やつと静かになつた。

「……じゃあ、今度は躊躇ひやん」食べかたあるだけのよ。

「あ、じゃあたしあんまり食べさせてあげますうー

お、じつは等仲良くなつたんだな。

「……………。」

リハづら、お互いの口に向もつてなハフオーリクを押し込んで喉を

ここからが仲良くなるのはまだ先になりそうだな。

「ほら、止めろよ一人とも」

「 」。 。 。 。

「...」

ふちつ。

俺の頭の中で何かがはじける音がした。

「てめえら……、いいかげんにしのやハントキシマ———!」

「 「 」 」

俺はもう我慢の限界だった。

「 黙つてみてりゃいい氣になりやがつて、こには俺ン家だ！ 静かにできねえなら出てけ！」

「 「 」 」

「ふう、やつと黙つたか。

俺は氣を落ち着けて言つ。

「 もつ一度言つが、こには俺の家だ。郷に入つては郷に従え、これからは俺のルールに従つてもらう

「は、はい・・・。」

「分かつたんですね～・・・。」

まず一つ。

「喧嘩はするな、どうしてもしたいなら外でやれ」

一つ。

「後片付けはきちんとある。出したらしまつ、それが基本だ」

「仲良くしろ、以上だ。もし、また何か変なことをするよつだつた

三つ。

「へこひじきは嘘をつくことを度量の無い

「。。。。」「

「。。。わかつたか?」

「「ねー。」「

「。。。。だ。」「

「じやあ、俺は寝る

「え? もひ寝るの?..」

「あ、明日は学校で朝早いだろ?」

「でもまだ一一時。。。」「

「もう一時だ。お前ひばりさんだ?」

「わたしは夜遅いから外出のヤだし

「じやあ、あたしも泊まるんです!」

「じや、お前らがやのベッドを使え。俺はソファで寝る

「あつがとあるです!」

「じや、ねやすみ!」

「「おやすみ～」

ふう、お開けひさ・・・。

がさがれ、ねじねじ。

「ふふ、ひひひ。せーしー。」

「うわあひつねああ

せれせれ、せりせり。ひまてんこほ。ひだらだら・・・。

Chapter 8・部屋（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

いつもより更新遅かつたですよね・・・。

やっぱり長さがこれだけでも構想練るのに時間がかかりますね。
次からはちゃんと短期間で投稿するようにします・・・。

頑張ります！

では、次の話でお会いしましょー。

「ふうつ・・・。」

朝から疲れる・・・。

なんていきなり俺、人気者になつてんだ・・・。

それもこれも、あいつ等の所為だ・・・。

・・・・・

朝、棗雪音と春野躊躇の一二人を連れて家を出た俺は、三人でゆっく
りのんびり通学路を歩く。

本当は朝にも一悶着あつたのだが、それは割愛しておくとしよう。

学校の前に来ると、校門の脇に人だかりができていた。
俺らが入ると、皆が一斉にこっちを見て、

「ひつくりしょおおつ！龍也、羨ましいぜー。」（主に男子）

「龍也君を・・・。私の龍也君を・・・。」（主に女子）

「「「へ？」」」

「とつあえず、逃げるぞー！」

「う、うんー。」

「ああーん、龍也先輩、愛の逃避行ですねえー。」

俺らは教室までダッシュする。

とりあえず教室まで行けば安全だと俺はそのとき考えた。

しかし、それは浅はかな考えだった事を教室についてから知る。

やつと教室まで来た俺らは、衝撃の真実を曰にする。
なんと、

「　　龍也ー・・・。」「

「　　雪音ひやんと櫛躑ちやん・・・、龍也君に向を・・・。」「

「　　ナ」「

俺らはあつという間に取り押さえられた。

誰かが、俺の家の前を通りたとき偶然俺の家の中から出てくる俺達を見つけたらしい。

それを見つけた奴が壁に貼り口して、王テない男子連中が俺を追いかけてきたみたいだ。

羨ましいぞ、この野郎、と。

それは幾らなんでも自分勝手すぎねえか？
ていうか、じゃあ女子は何だつたんだ？

その後、色々と質問攻めに遭い、今に至る。
躊躇は泣きながら一年の教室に帰った。

「まつたく・・・。」

なんていきなり俺人気者なんだよ・・・。
俺はもつと小ぢんまりとした生活を送っていたかつたのに・・・。
そんな事があつて親近感が出てきたのか、皆から結構挨拶をされる。
いつもなら、誰も田代を止めさせないのにな。

「ふええ・・・。」

お、雪音が帰ってきた。
こいつは俺が男子どもから尋問を受けていたとき、女子に連れられ
ていった。

「どうした、大丈夫か？」

「らいひょうふりやらいい～・・・。」

「・・・。」

何言つてんのかわからんねえ・・・。
多分大丈夫じゃないって言つてるんだろうな。

「ふえいりゅう・・・。」

雪音が席に倒れこむ。

・・・。

この調子じや躊躇の方も無事じやないだらつな。

「何せれたんだよ?」

「別に何もされてないけど・・・。」

「嘘吐くなよ」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・龍也くんに手を出すな、つてさ」

「・・・そか」

「うん・・・。」

「気にすんなよ」

「うん、大丈夫だよ」

雪音は俺に向かって笑顔を見せる。

・・・。

「いつ、結構可愛いな・・・。」

「どうしたの？ 龍也くん、顔赤いよ？」

「な、なんでもねえよ！ それより！ 蹤躅の様子見に行つてみようぜ。お前がその状態だ、あいつも無事じゃ済んでねえだろ」

「やうだね！」

案の定、躊躇もボロボロになつていた。

「おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですう～」

・・・。

全然大丈夫じゃなさそうだけどな・・・。

「お前は何されたんだ？」

「龍也先輩に手を出すなつてえ・・・。」

「お前もなんか・・・。」

「なんで俺に手を出すな、なんだろう・・・。」

「だって、先輩のファン、たくさんいますよう～？」

「「ファン？」」

「そりですよう？知らなかつたんですかあ？」

「で、でもなんで・・・。」

「あのクールな横顔が素敵だとか、あの先輩は絶対ツンデレだから、あのクールな仮面を剥いで甘えさせたい、とか・・・。」

「は・・・。」

ツンデレ？俺が？
なんじやそりや。

「でもあたしは負けないんですう！必ずや龍也先輩をこの手にい！」

「なにおうー私も負けないんだからあー！」

「勝手に人の争奪戦をすんなよ」

ていうか、俺いつからそんなにモテモテになつたんだろうな。
俺は今まで冴えないインドア派を演じてきたはずなんだが・・・。

「冴えないインドア派？何処がですかあ？体育の時間あんなにファ
インプレーを連発してたのにですかあ？演じるなんならもつと徹底し
てやりましようよ」

「あ・・・。」

そうだった、そり言えれば俺は体育の成績はいつも5だな。
俺としては手加減しているつもりなんだがな。

「そんなこと言つたら、既からせりて嫉妬と羨望の田でみられますよう？」

でもある。

「よし、わかつたー今度から私が鱗で龍也くんの凄さを宣伝してあげるよー。」

「いらっしゃんー。」

そんな事されたら俺はさらに入氣者になつちまつ。

俺は山の中で仙人みたいな暮らしこそのが夢なんでな。

「そんな事言わないでーね？遠慮しなくていいからさー。」

「あーそしたらあたしも手伝ひやすわー。」

「お願いだからやめてくれえー。」

やれやれ、雪音がきてからせりぱり俺に安息がなくなつてきたな・。

でも、このくらい樂しこと想つてしまつのは俺の氣の迷いなのか？

Chapter 9・学校（後書き）

乱筆乱文誠の失礼。

今回は更新結構早く更新できてよかったです。

PCもこの頃調子が良くなつてきて、いい感じです。

ただ、この頃感想書いてくれる人が少ないです・・・。
できれば、なんでもいいので感想お願いします・・・。

Chapter 10・学校&帰り道（前書き）

更新遅かつたですね…。すいません。

「へへ…、やつと落ち着いた…。」

俺は今、トイレの個室の中にいる。

そんな所にでもいないと、落ち着いていられないからな。

大体、教室があんなに屈辛いところだとは思わなかつたぞ…。

俺が机に座つてゐるだけで、誰かが話しつけてくる。

俺は今までの生活上、他人と話す事がほとんど無かつた。

ほぼ歸無だ。

それは、俺が今まで教室で仏頂面を崩したことが無かつたから、皆が俺のことを怖がつていて、俺に寄り付こうとする奴がいなかつたからで。

それでも俺に親しく接しようとした奴は、俺が冷たく突き放すのが普通で。

大抵の奴は、それでもう俺に寄り付く事が無くなつた。

それでもへこたれずに俺のことを追いかけまわしてきたのは躊躇一
人である。

そう考えてみると、躊躇は強いよな…。

今まであいつにはひどい事を言つたり、冷たく接したりしていたから。

今になつてそれを痛感する。

ごめんな、躊躇…。

「つと、じとんどこで感慨に浸つてゐる場合ぢやなかつたな

もうすぐ授業が始まる。

授業へ出ること…。

「アリサの出るか」

俺はトイレから出て教室に向かつ。

向かつ途中の廊下で、何度も声を掛けられる。
鬱陶しげたらありやしない。

そして、教室に入る。

「龍也くん、また怖い顔になつてゐるよ」

「仕方ないだろ、今までずっとこんな顔してきたんだ。今更ビビりうどあるか」

入つたとたん、雪苗に声を掛けられる。

「せ、せつかく龍也くんにもお友達ができるうなんだから、そのチャンスをフイにしたら駄目だぞ?」

「わざわざ戻戻りして聞かうとしたけど、あんじやねえ」

「ほー、龍也くんはひどこねえー」

セウヒーに向かってこねるつまひ先生が入つてくる。

「おり、席につけ席元へわざわざ授業はじめるべー。」

「わひと、今回せいいじまでーひやんと復讐してくるんだぞ」

「ふうあああ……、せつと終わつたあ……。

「あ、あと体内一放課後職員室来いー！」

「へ？俺か？
何で俺が……。

特に何も悪い事してないぞ？」

「くつへへん、龍也くん、呼び出された～！」

「「うう わこーー」

いちいち雪音がちやちやを入れてくる。
でも、何でだる……、ホントに心当たりがないな。

・・・・・

放課後。

授業が全て終わり、皆が部活へ行つたり、家に帰宅する最中、俺は

職員室の前に立っていた。

「…………。」

畜生、緊張する…。

職員室にこんなに入りにくい場所だったのか…。
でも、駄目だ。

こんな感じでうわづらしても始まらない。
意を決して、ドアをノックする。

「し、失礼します…。」

入ると、先生がこつちに手招きをしていた。

「…？」

おとなしげ近くに立つ。

「あ～、呼び出しが悪かったな

「いえ、別に構いませんけど」

なんだ、起じられるんじゃ無いのか?
嫌にペレペレしてた感じなんだけど…。

「実は、折り入つてお前に頼みがあるんだが…。」

「…? なんですか?」

「それがな…、」

帰り道、俺は柄にもなく悩んでいた。

それは、職員室で言われた話が原因だった。

その話とは、簡単に言うと不登校の女子を学校に来させて欲しいといふのだ。

なんで俺が?って感じだろ?

俺がなんでだと聞いたら、こんな答えが帰ってきた。

「実はな、彼女が不登校になつた理由はお前にあるんだ」

「はあ?」

その子は、俺のことが好きだつたらし。

そして、俺の靴箱にラブレターとか言つやつを入れたんだそうだ。
そこで、俺がどんな反応をするかといつのを、靴箱の陰に隠れて見ていたんだそうだ。

そのとき、俺がとつた行動とは…。

「お前、その手紙、その場で破り捨てたんだそうだな

「げつ?」

見てたのか…。

そもそも、ラブレターなんて俺の靴箱に毎日のように入ってるもんだしな。

いちいち確認したりしないで捨てるのが俺のいつもやり方だ。

しかし、本人が見ていたなんてな。

「という事で、責任を取れ」

そう言い渡されて、その子の家までの地図を握りされ、職員室から追い出された。

そして俺は、今その子の家に向かっている途中。

一体どうすりゃいいんだろうな……。

そんな事を考へてゐるうち、その子の家に着いた。

俺は、少し考えてから。

「ふう……。」

「ピンポン」

呼び鈴を押した。

Chapter 10・学校&帰り道（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

すいません、更新遅れちゃいました。

また危なく一ヶ月放つて置くところでした…。

ところで、これを書き始めたとき辺りに、連載もひとつ始めました。
興味のある方はそちらもどうぞ…。
感想よろしくお願ひします。

Chapter 11・帰り道&友達三号（前書き）

パソコン新調。

ピンポーン。

俺は覚悟を決めて呼び鈴を押した。

数秒待つてインター ホンから声が聞こえる。

「はい……、どちら様ですか……？」

疲れたような女子の声。

マジ幽霊みたいだなあ。」

俺は答える。

「あ～……、町内ですか～？」

「つゆ、龍也さんですか～？」

とたんに女の子の声が元気のある声に変わった。
一体なんだこの変わつよつは……。

「な、何でここにいるんですか～？」

「うつよつか……。

ここは嘘をつくべきなのか？

「えっと、俺のせいで学校来てないって聞いたから、心配になつて

な
..
。

「…え？ 龍也さんがわたしの事を…？ うれしい！ 今行きます！」

「いや、別に……！」

俺が言い終わらないうちに、ドタドタと階段を駆け下りる音がする。
やれやれ、ほんとはインター ホン越しだけで励ましの言葉を掛ける
つもりだつたんだけどな…。

「お待たせしました！」

突然勢い良くドアが開き、小柄な少女が顔を出す。

純粹で清楚なイメージだな。

גָּדוֹלָה...

いきなりの登場に戸惑う俺…。

結構な美少女だぞ？

俺はこんな奴に告白されてたのか……？

「あ、あの…！」

いきなり真っ赤になつて、つむじちまたよ...。
うーん。

俺、どうすればいいんだ？この状況…。

「わ、私の名前、わかりますか？」

۱۰۷

- 1 -

れたり

先生から何でも聞いちゃうんだ

ソノハシヲ持テとキモ各見ながニカシナ

一 やつはり、知らないんですね……？」

「そ、それは……！」

いきなり涙を流しだす彼女。

「……」に来たのも先生に言われて来ただけで、自分の意思で来た訳じゃないんですね……？

「まあ、そりだな

「おめでた」

「悪いな」

「いや、いいんです…、多分そんな事だと思ってましたから…。」

ה'ג

なんだろう、この胸の奥から湧き上がる罪悪感。
なんか物凄く責められている気分だぞ……。

「な、なんかゴメン…。」

「いえ、龍也さんが謝る必要なんて無いんです……、わたしがラブレターなんて入れて勝手に傷ついただけなんですから……。」

……？

なんか更に責められてないか？

「あ、あの……お願いがあります！」

「ん? なんだ?」

「もう彼女にしてくれなんて言いません！だから、友達からお願いします！龍也さんはあまり友達を作りたがらないのは知っています！でも……！」

友達を作りたがらない、ねえ……。

「ま、友達くらいいならいいけどな

「ほ、本当ですか！？」

「ま、また付き合つてとか言われても困るナビな

「あ、ありがとうございます！」

深々と頭を下げられる。

そんなに感謝される事なのか？

「えっと……」

「わたしの名前は、御厨^{みくら}のま、です。」

・・・・・

「は？ そのナビウしたの？」

「… 友達だ」

あれから俺たちはこの家の家でお茶をした後、このはを俺の家に誘つた。

話してわかったのだが、このははかなり引っ越し込み思案のようだった。俺にラブレターを出したのも一大決心だつたらしく。

俺、悪いことしたな…。

これから気をつけよう。

おっと、話しあはれたが、このははその引っ込み思案な性格で、友達があまりいなかつたそうだ。

だからうちには雪音や躊躇がいるから、いい友達になれると思ったわけだ、俺は。

「あ、えっと…、御厨^{みくら}のまと聞こますー。よろしくお願ひしますー。」

「もしかして……、」

「……れは？」

「」「ライバル出現！？」

「そんなんじゃねえって」

……。

これでまた俺に周りが騒がしくなるな。

こうやつてると、もしかして俺自身が面倒事を引っ張り込んでるんじゃないのか？

それにしても、数日で変化が有り過ぎだろ、俺の人生……。

Chapter 11：帰り道＆友達二号（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。
パソコン新調しました！
色々便利になりました。
これで気持ち良く小説を書けるというものです。
これからも頑張りますよ～。
感想お願いします。

Chapter 1-2・逃走中（前書き）

毎度ありがとうございます。

Chapter 1-2・逃走中

「ちゅうとーまつてー」

「嫌だー・ソ絶対に待たん!」

後ろから追いかけてくる。

それから必死で逃げる俺。

・・・。

何でこんな状況なのかと言つと。

・・・・・・・

俺がこのはを連れてきてから、雪面と躊躇は一気に不機嫌になつた。
なんでも、ライバル出現だそりで…。

それはこのも同じみたいで、普通は仲良しくしているのに、俺が絡
むと急に喧嘩腰になる。

「龍也先輩には、あたしが食べさせてあげるんですー!」

「いいえ!私が食べさせらるんですー!」

「いや、わたしよー…べ、別に、龍也くんのためなんかじや…ない

んだから…、もう少しひかあ！」

「 もうシンチレはここ...、 てか飯ぐらこ自分で食えるからほつとけ

1

みたいなやりとりがしばしば。

そこで、行き着いた先が、

先に龍也くん（さん、先輩）を自分の物にしなければ…。

だったよつだ。

そしてその時から俺は、血（いや、俺か…。）に飢えた獣どもに追い掛け回されているわけで…。

• . . . • .

こういう状況だ。

とんだ災難つてもんだ。

「何で嫌なのよー！いいじゃない！わたし、そこそこ可愛いんだから！」

۱۵۷

「いやー、やうこつ問題じやねえかー！」

俺はこの小説を18禁に指定するつもりはないぞ！

きっと18歳未満の人も読んでるしな。

「……でも、外伝とかならいいかも……。」

「え？ なんの話？」

「こやくすんな、独り言だ」

迫り来る躊躇<じゅしゆ>のはをかくべつじまで逃げてきたつての！」

「へへ、いいまでかー！」

「せつ、じこまでよー……ふつふつふ、観念なたこー。」

路地裏、俺の後ろは壁。

逃げ場はない。

……。

「龍也くんーかあくーおーー！」

「待つたー今日は止めるー今度相手してやっからー。」

「……え？ ほんとー？」

もちろん嘘だ。

ただ、この場を切り抜けるには…。

「そもそもまだ俺たち、出会ってから一週間しか経っていないじゃな

いか、まだお互いの事を良く知りもしないのに、そういう行為に及ぶのはいけないと思つんだよーつさー」「

「た、確かに…。」

「だひー!? だからもう少し待つてくれ。俺の心の準備が出来るまで…。」「…。

「…うん、わかつたよ、待つ。ちやんとわたしに振り向いてくれなれや、…駄目なんだから…。」「…。

そつこつて雪音は、顔を赤らめ逃げるように去って行きました。

成功しちゃったよ。

やつてみるもんだな…。

「しかし、もし嘘だとばれたら…、」「…。

確實にとんでもないことになるだひーな。

しかも、仮にばれなかつたとしても今まで以上に追撃が激しくなるのは必死だ。

「畜生、ふたをした箸のくせこものがパワーアップして帰つてきまがる」「

やつぱその場じのぎじや駄目なのか。
ほかに考えられる、これからの策は…。

「ほんとこ彼氏になつてやる、か?」「

.....。

いやいやいやいやいやいやいやいや。

だめだ。

それは無い。

俺の身が確実に危つい。

いつたい何をされられるか分かつた物じゃない。

「しかも、誰か一人を選んだら俺がほかの奴に.....。」

殺される。

確實に。

「俺の将来つてお先真つ暗じやないか！？」

助けて天国。「その他にいるお母様&お父様！
その鋼の肉体であなた方の不肖の息子を救ってくださいませー。

「.....。」

無理だよなあ。

大体俺の両親の肉体は鋼じや無かつたし。
え？ そういう問題じやない？

「...とりあえず家に帰るか

やれやれ。

家に帰るとこいつのがこんなに憂鬱だったのは初めてだ。

でも、なんとなくちょっと楽しみなところもあるんだよな。
俺の周りは昔と比べてずいぶん騒がしくなっちゃったけど。

これはこれで、ありなのかもしない。

Chapter 1-2・逃走中（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

これから更新はこれぐらいの早さになつてしまふかもしません。
もうひとつ連載物と変わりばんこの順番で更新していくので…。
なので、もうひとつ連載物と変わりばんこで読んでいただくとち
ょうどいい…、かな？

感想、質問よろしくお願いします^v

Chapter 13・探し人（前書き）

ちょっとシリアスに仕上げてみました。

「ひい…、やつと家に着いたぞ…。」

夢にまで見た玄関の扉。

どうやら必死に雪音から必死に逃げていたから、随分遠くまで走っていたようだ。

帰つてくるのに一時間かかった…。

俺はいつたいどれくらいのスピードで走つていたんだろうな?

不幸なことに財布も持つていなかつたため、徒歩での帰り道。あれほど金が欲しいと思うのは、最初で最後だつただろうな…。鍵がかかっている扉を開けて、家に入る

「ただいま…。」

疲労困憊した俺は、すぐさまソファに寝つ転がる。

シャワーを浴びる元気もないぞ…。

やつと家に着いた安心感で眠気が襲つてくれる。そこでひとつ気付いた。

「……雪音たち、どこにいるんだ?」

いつもなら帰つてくるとすぐ玄関に顔を出し、じやれてくるあいつらが。

俺が帰つてもなんのアクションも見せないとほ。

「明日は、トマトの雨が降るかもな」

くだらない思考はおいといて、あいつら、家にはいないのか?

…………そういえば家に鍵がかかってたな。
いつもならあいている筈なのに。

もしかして、

「まだ帰ってきてないのか？」

俺を追いかけたから、まだ俺を探し彷徨つてるとか……。

恐ろし過ぎる……

あいつらのことだから絶対他人に迷惑をかけている。
たとえば、

「オラアー！ 龍也先輩はまだここにいるんですかあ……吐きやがれですか
リカア……！」

「ひ、ひこーお助け～！」

みたいな

このはに限つてそんなことは無いだろ？ が、それに近いことはして
そうだな。

あいつは俺がかかわると見境なくなるし。

「……じゃあ何で雪音は帰つてこないんだ？」

あいつには俺が言つて聞かせたし、それで納得して帰つていつたはずだ。

あいつが俺のことを探しているなんて事はない筈なんだが……。

「…とりあえず探しにいつてみるか」

やれやれ、息つく暇も無い。

俺はすぐさま外に出て、三人の捜索を開始した。

• • • • • •

三人は携帯をもつて行つてなかつた様で、町中を虱潰しに探すしかなかつた。

「おまえのやうに暮し方、ていうか、
おまえのやうな想い出で、

「お前はいつたに何やつてんだよ。」

「だつて先輩がいなくなつちゃつたんですよ？誰かに襲い掛かりたくもなつちやいますう！」

卷之三

こいつは絶対一人にしてはいけない。
かばんの中にもいれて持ち歩かなれば。

「のせは隣町のスーパーマーケットの前で体育座りで縮こまつて泣いていた」ところを発見した。

心配のあまり近所のおばさんが隣で慰めてくれていた。

……。

「こりゃこりゃ向やつてんだか。

近くにゆるど、

「あんた！なんど！」のせばにこてあげないの…。」

「い、いいんですおばさん！私が勝手にせばにいただけなんです！
その人は悪くないんです！」

「でもねえ、こんな可愛い子を泣かせちゃ駄目じやないのー！」のせ
ばは「こんなにあんたのことを持つてるんだから」

「そんな！いいんです！龍也さんの所為じやないんです！」

……。

そんなやつ取りが五分ほど続いて。

おばさんから解放された俺たちは雪音を探す。
しかし、

「なんだ！」のせはペロペロキヤンハイーなんか握り締めてるんだ？。」

「わ、私のねばせがくれたんですね、わたしが泣き止まなこから」

「…お前はガキか」

うれしそうにキャンディーをなめる」のは。
ほんとに子供っぽいな…。

「…あとは雪音だけなんだが」

なかなか見つからん。

一体どこのをほつつき歩いてるんだか。
そのとおり。

携帯の着信音が鳴った。

画面には見慣れない番号が映っている。

「誰だ?」

とつあえず出てみる。

「もしもし?」

「富内龍也か?」

聞き覚えの無い男の声。

「じゅり様でしょつか」

「棗雪音を預かっててる。返して欲しけば今すぐ二三十万用意して六
丁田公園へ来い」

それだけ言って電話は切れた。

おい。

ちょっと待てよ…？

俺は、一人に先に家に帰っているよう言つて、銀行に走った。
犯人に言われた通りにするのも癪だつたが、今はそつするしかない。
俺は、かなり焦つて気が動転していた。

銀行で金をあらしたが、どう持つて行つたものか悩んだ挙句、銀行
の人にバッグを借りて公園へ走つた。

このとき、初めて両親が残した莫大な遺産に感謝した。

六丁目公園は銀行から遠かつた。

このはを探しに隣町まで来ていたので、また戻らなければならなか
つた。

ほんとに何も考へていなかつたから、電車やタクシーを使おうなん
て思いつかなかつた。

やれやれ、今日はほんとに走ることが多い。

六丁目公園に行くと、雪音が一人で立つていた。

俺は慌てて雪音に駆け寄る。

「あれ？さつきの電話の男は？」

「…あれ、近所に住んでる通りかかつたおじさんなの」

「……は？」

意味がわからん。

何で近所のおじさんが俺に脅迫電話を？

「だから、これといったらうなのー。」

「…なんだつて?」

「いたずら?」

「じゃあ、

「わざわざの電話は嘘か?」

「う、うん…。」

「ほ、」

馬鹿野郎、と。

大声で怒鳴りうとしたのに。
安心感で声が出ない。

「無事で、よかった。。。」

俺は思わず雪音を抱き締める。

「龍也くん、泣いてるの……？」

自分でも知らないうちに。

俺は涙を流していた。

久しぶりに流した涙。

両親が死んだ時にも流せなかつた涙。

それが、なんでこんなときに。

俺は地面に投げ出した三千万も忘れて、しばらく雪音を抱き締めていた。

Chapter 13・探し人（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

今回はちょっとぴりいつもと違う雰囲気で仕上げてみました。

僕の今の心がこんな感じなので…。

というか、自分でこの小説読み返してみたら、やたらと二点リーダーが多いんですね…。これです。

ちょっと自虐しないとかも。

感想よろしくお願いします。

雪音との帰り道。

何故、あんな人を心配させるような冗談を実行に移したのだろうか。

それこそ、近所のおじさんまで使って…。

その理由を歩きながら聞いた。

「だつて、…不安だつたんだもん…。」

「不安つて…、何がだよ?」

雪音はとつとつと話しかけ始めた。

「昼間、龍也くんはもう少し待つてくれって言つたよね?わたしちがいかがわしい行為に及ぼうと龍也くんを追い掛け回してたときには?わたし、その時は勢いで納得しちゃつて、龍也くんに、もう少し経てばその気が起きてくれるんだと思つて、舞い上がりつけて…。

得意のツンデレまで披露しちゃつたし。

「でもね、家に帰る途中で考えたの。もしかしたら、さつきの言葉は嘘なんじゃないか、って。それこそ、臭いものにふた、みたいな感じで…、わたしが邪魔つけだつたからその場でぱつと嘘をついてわたしを追い払おうとしてたんじゃないかつて。

「わたしは龍也くんが大好きだから、龍也くんを疑いたくなかった。でも、それと反面、きっと龍也くんならそういう嘘、平氣で吐きか

ねないつて。…思つちゃつたんだ。

「ほら！わたしつて活動的な方じやない？考えたらすぐ突つ走つちやうつていうか、考えなくとも体が勝手に動き出すつていうかさ。だからわたし、珍しく考えたんだよ？どうすれば龍也くんがわたしのことを大切に思つてるかわかるかな、つて。そして、考えて、考えて、さつきの嘘を思いついたの…。」

龍也くん、お金持ちでしょ？でも、その割にはお金を使うのを嫌がつてたし、ホントに必要なものにしかお金を使わないじゃない？だからもしわたしが誘拐されて身代金を要求されたら、龍也くんはわたしのためにお金を使ってくれるのかな、つて…。

ここまで考えて、最初は考えるだけだったのに、そのときになつて脳の活動的な部分が働き出しちゃつた、つていうか…。確かめたくなつちやつて…。

それで、近くを通りかかったおじさんに無理矢理手伝わせて、おじさんに電話をかけさせたの。…あはは、おじさん大活躍だよね。それで、三十分くらいたつたあたりで、おつきなバック持つた龍也くんが、汗だくで公園に走りこんできたの。…龍也くんの姿が見えたときには嬉しかつたなあ。…ところで、なんで乗り物使わなかつたの？…え？そこまで頭が回らなかつた？必死だつたから？…えへへ。

ま、それで、わたしの無事を確認した途端、龍也くんはわたしに抱きついておんおん泣いちゃつたのでした！おしまい！

今回のこと、龍也くんがわたしのことを大切に思つてくれていることがわかつたから、満足しました！「メンね？龍也くん…。一度とこんなことしないよ。まさか、龍也くんが泣くほどわたしを心配してくれてるとは思つてなかつたから…。期待はしてたけどね？」

とまあ、そんなこといらじー。

まつたく、なんたることだ。

俺としたことが、情けない…。

雪音に涙を見せたことは、ビリでも良い。

問題は、雪音にすべて見破られていたことだ。

あの時に言った言葉は、その通り、その場の嘘だつたらしい。

俺ならば、そんな嘘を平氣で吐けるところじゃ。

俺の所為で雪音に不安感を抱かせてしまつたこと。

それは俺にとって、最大の汚点となるだらう。

俺は、嘘を吐くのが得意なつもりだった。

誰も俺の嘘を見抜けないと思つていた。

何故なら、俺はこれまで、自分に嘘を吐きすぎたから。

俺は自分を騙してたんじゃない。

俺は、自分自身を誤魔化して生きてきたんだ。

自分に嘘を吐き、その嘘で嘘をされる強要してただけなんだ。

そんな奴の嘘なんかに。

誰が騙してくれるものか。

俺は「これまでの所業に絶望した。

人を騙して生きてきたと思っていた。

他人は生きる価値など無い、何故なら俺の嘘に簡単に騙されるから。

そんな程度の人間など、生きる意味など無いだろうと。

そう思っていた。

だけど、本当は違った。

生きる意味が無いのは、俺のほつじゃないか…！

「ほらほらーなにをそんなに悲痛な顔をしてるの？わたしは無事だ
ったんだから、それでいいじゃない！」

「……『めんな

「……へ？」

「『めん、俺がいつも適当に雪音の』とをあしらつてたから、お前
を不安にさせちまつた…。」

「べ、別にいいんだよ？今回のことでの、龍也くんがわたしのことを
人並みに大切に思ってくれていたことがわかつて、わたしは安心し
てるんだから！」

「いや、俺は安心できないし、満足もできない」

「…だからあ、別に大丈夫だつて」

「俺が大丈夫じゃないんだ。今回のことではつまつした
「認めたくないが、俺は雪音のことが好きだ」

「俺と付き合つてください、これから俺をよろしく頼みたい」

うまれて初めて、俺は皆口といつものをした。

今まで、嘗て寄りられることがばかりだった。

誰とも付き合つたことは無いとも言わない。
でも。

こんな気分になつたのは初めてだ。

結果を聞くのが怖くはあつたが、それでも少し、すつきりした。

心をがんじがらめにしていた鎖がとれた気が、した。

「そんなことをいちいち言わなくとも」

「わたしあずつと、龍也くんをみるしくしてあげるよ。」

「ありがとう、龍也くん、わたしもだいすきだよー。」

頬を赤らめながらも、ちゃんと口こだして言つてくれた。
そのときの雪音を、俺は今まで一番愛しく感じた。

どうやらともなく抱き合ひ、口付けを交わす。

今までの誰ともしたことが無いような、深い、口付け。

俺はこの瞬間。

自分が生きていく意味を見つけた。

Chapter 14 · Find (後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

遅い更新でしたが、待つた甲斐はあつたでしょうか？

今回は、無い脳みそを絞つて絞つて書きました。

正直、書いた後自分で読み返し、泣きました…。

多分僕が親バカなだけかも知れないですけど。

僕が味わった感動を、是非読んだ皆さんを感じ取れたらと心から思います。

ちなみに、最終話っぽいですが、まだ続きます。

感想、意見等、よろしくお願ひします。

遅い更新は命取り。

「俺たちは付き合いつこにした」

「ええええええええええ！」？」「

俺はバカ正直に、これまでの経緯とこれから的人生設計について、馬鹿正直に話した。

・・・・・・・・・・・・・

話し終えて、ふたりはため息と同時に、

「「ありえないですう！！」

叫んだ。

まるで必死の形相だ……。

「私の方が龍也さんを渡していくに決まつてこまかー・黙々かご」と
さきに龍也さんを渡すわけにはこられません！」

「せうですせうですうー・龍也先輩はあたしのものなんですかー・」

「ちがつよー・わたしが付き合ひつて決めたんだからわたしのものな
のー！」

睨み合つ二人。

……まあ、予想はしてたんだけどな?
もしかしたらという淡い希望に身を任せてみたんだけどな?
やつぱりつなるオチなんだな・・・。

てか、ことじとく期待を裏切らない奴らだなお前らはー！

「ま、まてまてー少し落ち着けー！」

「「「落ち着けるわけないじゃないかー」「」」

……わうおう、俺が何か言つて三倍で返つてへるー。

「……あのな?これは俺が選んだことだ。自分でも勝手だとは思つが、
口出しさは許さないぞ?」

若干凄んで言つてみるが。

…内心恐ろしくてたまらん、所詮はつたりだ。
しかし、

「「「」、「めんなやー」」」

効果はできめんだった。

上手くこなすのがひとつぱり怖いものがあるな…。

「…でも、簡単に引き下がるわけにはいきませそ」

「…もうですう、龍也先輩が大好きなのは、みんな一緒なんですか？」

…「へーん。

「でもな？ 蹴躡には言つてない、といつか、こんな事になるとは予想してなかつたもんだからすっかり忘れてたけど、このはには、俺がお前と付き合つ意思が無いことを事前に言つていたはずだけど…？」

ちゅつと皿の上のことを持ち出しつけて、反論を試みる。が、

「そんなこと忘れましたー今更関係ありませんー龍也さんだつて私があなたのこと好きなのを知つていたのでしょうかーそれなのに、…つい、こんな仕打ち、あんまりですー」

「やうですそーですーーあたしだつてずっと前から龍也先輩に目をつけてたんですねーー？ それこそ雪音先輩がこっちに来るまでは、昼夜を問わずずっと龍也先輩の後をつけて！ 龍也先輩のことを寝るときまで考えて！ 龍也先輩でいやらしく妄想にふけついていたんですねーーそれなのにーーそれなのに突然来た転校生にあつさりすっかりごつそり盗られてしまふなんてえーー！ 酷すぎるですうーー」

…最後のいやらしく妄想云々は余計だよな？

いや、他のやつもホントは余計なんだが、この頃のこいつらの奇行で耐性が出来ているのかもしれない。…うーん、慣れは怖いな。

「…あんたたちねえ、言わせておけばあつ！」

ついに雪音が切れた。

「まったく！今まで尾行したりラブレター書いたりちまちまやつてる暇があんなら、もうちょっと積極的にアピールすればよかつたじゃない！あんたたちがのろのろしてるからわたしが電光石火でとつてつたんじゃないの！ちゃんと面と向き合つて会話をすれば、大抵の人は誰とでも仲良く出来るもんなのよ！それなのにあんたたちはうじうじと！大体ねえ、人間同士の関係に、早いも遅いも無いのよ！時間じゃないの、質量なのよ！わかる！？密度よ、密度…どんなについ最近あつたばかりでも、そんなの全然障害じゃない！問題はその人と、どれだけ色んなものの詰まった時間を過ごすかなのよ！躊躇ちやんだって、尾行してただけで、そこからのアクションは何も起こしてないじゃない！精々名前を覚えてもらつた程度でしょ！？あんただつて本気だったのはわかるよ？でも、それだけじゃ何も始まらないじゃない！」

「…………うう」

「このはちやんだってそう！あんだが極度の恥ずかしげり屋さんで、龍也くんに手紙を書くのも、大変な勇気が必要だつたことは、これまでの付き合いでわかつたよ？本気の手紙だつたのに、目の前で破り捨てられちゃつたときのショックだつて、計り知れないとおもう。実際、登校拒否になるくらいつかつたんでしょう…。でもね？そこで止めたらなんにもならないじゃない！せっかく勇気を振り絞つて書いたんだから、とりあえず面と向かつて告白しちゃえば良かつ

たのよー！あなた、可愛いんだから、ひやんと黙ってれば今頃きっと
らぶらぶだったよ？今頃言つても遅いけど……とにかく、あんたた
ちが、行動が遅すぎたのよー。」

「…………」「ううう」

「わかったー？わたしを睨むのは筋違いつてもんよー……あーあ、び
っくりマーク付けす、おと自虐上がしちゃったじゃなーの……」

「「わ、わかりました……」「

おへしゃりと認めてくれたか。

「龍也先輩のことば、今回のことばあおりみておきまか。しかし
一隙あらば横から搔つ攫つてこへのど、やこのとこわざ！」と承くだ
れ……」

「右に同じでやう、……じやあ、荷物をまとめます……」

「はあ？」

「こつ、なんつった？

「だつて、龍也先輩たちは何を合ひ合ひしそう？あたしたちがいた
ら邪魔じゃないですか」

躊躇の横で「へへ」とうなづく。「のむ

……どひしたものか。

「いや、その件なんだがな？お前らは引き続きリリレ泊まつてもいいんだ」

「「「え？」」」

……いつせいに意外そうな表情を浮かべ、一いちらを見る。

いや、実際に意外だつたんだろうが。

「付き合ひつとじつても、しばらく俺は健全なお付き合ひをしたいと考えてる。そのためには、此処で一人で暮らすといつのは、俺の貞操を考えて危ない、ということで、一人にはこのままいこにしばらくの間居座つてもらう。まあ、いつまでもこんなウブなこと言つてられないことはわかつてゐるんだが、そういう関係になるのはまだ早いかなあ……とか」

「……な、なんてこと」

雪音の顔がショックに歪んでいる。

ありやま。

でもしかし、

「あ、ありがとう」「わざとまあー。」

「やつたあーまだ先輩と一緒にくじせゐですうー。」

「やつたのー一人は大はしゃぎだつた。」

俺と雪音の間に置いての肩書きは変わつたが、それ以外はほとんど

変わることが無いまま。

もちろん、いつか一線を踏み越えなければならなくなるときがくるだろうが、それまではこのままの関係が、だれにとっても居心地がいいことは、みんなが良く知っている。それまでは、誰一人欠けることなく、ずっと平和にいけたらいいなと。

そう思う、今日この頃だった、まる。

なんて、感動的に終わりたいものだが、無論、そんなことがない事をこの俺は確信している。

残念なことに、雪音という生き物に落ち着き、といつも言葉が無いことを俺はしつてこるからな。

乱筆乱文誠に失礼。

一段と遅い更新。

ほんつつとに、申し訳ありませんでした…。
色々言い訳をせてもうつと…ある賞に応募しようつて思つて居る小説を執筆中なのです。

努力はしますが、これから先、こんなことがあるかも…。
頑張りますので、見捨てないでえ…。

遅くなりました…。

そんなこんなで、俺と雪音は付き合いになつたのだが…。

「チツキショー！！納得いかねえ！！」

雪音の叫びが、今日もこだましていた。

変わつたのは一人の立ち位置だけ。

このはも躊躇も同じ家に住み、夜の秘め事もさっぱり無し。

夜な夜な夜這いを掛けてくるも、一蹴する俺。

そんな堂々巡りの状況に、嫌気が差したようだつた。

そんなこと言つたつて、仕方ないじゃん？

俺、童貞だし、なんか怖いし。

きっと、そんな状況になつたら、雪音がしつかりリードしてくれる気がするんだが、それでも進んでやろうとは思わない。

いや俺、基本根性なしですから。

とまあ、こんな言い訳を色々と考えてみるわけだが、結局のところ、

俺が優柔不断なだけだ。

雪音には色々と迷惑をかけるかもしれないが、少し我慢してもらおう。

「しょうがないだろ？俺たちはまだ未成年なんだぞ？」

「こまびせ、高校生でもやつてる」とはやつてるのー。」

「い、いや、なんてことをしてるんだ…」

「照れるな——！」

だつて、恥ずかしいもん。

「まつたく！いつもいつもクールに気取ってるくせに、なんでもそつ
いつ関係のことは全く駄目なの…？」

知るか。

なんかトラウマでもあるんじやないのか？特にお前に対して。

「ここは、あたしにもチャンスがあるひとですよねえ…？」

「そ、そのようですね…。いつのこと、一人で協力して…！」

「こいつらの目が光ってる…

少しずつ本性をあらわしつつあるな…。

「お、お前らは何故そんなに積極的なんだ！？一般的には、男性よ
り女性の方が性欲は少ないんじゃないのか！？」

…つて、学校でいつてました。

「それは先輩が女を知らなきゃ済るんでしょうー。」

「わたしだつて、好きな人と一つになりたいと思いますー。」

「そーだそーだ！龍也くんが分かつてないだけなんだい！」

むーん…。

き、厳し…。

「と、とりあえずー俺の調子が整つままで待つてくれよー。」

「そんなこと言つてーまた逃げるんだじょー。？」

イエイエ、ソンナコトハアリマセンデスヨ、ハイ。

「不自然な片言をしゃべるなあー。」

「ハ？ワタシニニホンゴ、ムズカシスギテース。モット、すうーテ
ハナシテクダサーカーイ」

「誤魔化すんじゃないわよー。」

畜生ー！これでいけると思ったのに…！

「いけるわけないでしょー。」

「げふつー。」

じじつ、彼氏に向かつて膝蹴り食らわしあがつた…。

「ひ、ひどいー齧齿は、本当は俺を愛してなかつたのかー。？」

「へ、へえー。」

「俺は」こんなに雪音を愛してゐるから云々。雪音は俺を叩き飛ばす。

泣き崩れる俺を前に、おのむりゅうの黙想。
…へつ、ちゅういもんだぜ。

「わ、悪かったわよ!」、だから、ね?泣かないで?」

「此後、おまかせ。」

「久のせさん、雪音先輩が翻弄されてますうー。」

「あやあつ！駄目つ！なんか、私たちの前でこいつの姿を見せられぬヒーと、溶けちゃう……！」

まあ、本当は一度と使いたくない手だが……。

：今回ばかりは仕方が無い。

「雪音えへ、俺のこと、……好きい？」

「溶けたやつ……？」

我ながら汚い手を使うが……。

この手にはめられるあいつらも、相当おかしいよなあ……。

「うひつて、『まかじ』まかしきて『られぬのも、こつまでだひつな
…。

今俺にくつついでいる」こつらだつてバカじやないだひつて、こつ
か押し切られる日が来るのだろつか…。

考えただけで背筋が寒くなるが、抱ひし続ける俺も、甲斐性なしの
レッテルを貼られそうで嫌ではある。
といふことで、どうしてもな時には快く受け入れてやる』とこしゆ
うか…？

「ああ～ん！ 龍也くん！ 好き好きい～～！」

「溶けちやう～～！」

「い～加減離れろ貴様ら～！」

やつぱししさりへは止めといたほつが良いだろつか…？

Chapter : 16 進行停止（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

すいません…、とつても遅くなりました…。

受験生の恐ろしさを実感させられた感じです。

いやあ、PCを立ち上げることもなかなか出来ないとは…。

感想、よろしくお願ひします。

Chapter 17 悪魔のハナユリ（前編）

ごめん、もう少し更新お待ちしてました…。

Chapter・17 悪魔のパン屋

「ぐぬぬぬぬう…、うがああああつ…」

雪音の我慢が、どうやら限界に達したようだった。
なんの脈絡も無く、雪音は俺に飛び掛り、ベッドへ押し倒す。

「うおつー…お、おい！ 落ち着け！ よく見ろ、俺だ！」

この場合、俺であるとしてもなんの関係も無いのだが、とつあえず
そう叫んでみる。

と、雪音は我を取り戻したかのように田舎をぱちぱちくらし、頭を振つて
考えこんでいる。

「おーい…、大丈夫かあ～？」

とつあえず声をかけてみる。

「大丈夫なわけあるかあーー！」

いきなりの大声、びっくりするなあもつ。

「何が大丈夫じゃねえんだ？ 俺に話してみ？」

「コ、コノ野郎…！ そもそも龍也君の所為じゃないかあーー！」

「俺が一体何をしたって言つんだよーー！」

逆切れ合戦。

いや、なんで怒つてんのかは大体予想がつくんだが…。

「なんどよー? なんでわたしと×××してくれないのー?」

「こー、こー、女の子がなんてことを…」

「だから照れるなー…」

いやいや、男の子はナイーブな生き物なんだ…。

「こつまで待てばいいのよーなんなのこの放置プレイ…!」

「こー、こー、女の子がプレイだなんて…」

「うーせーーー! プレイ以前の問題でしおうがー!」

まあ、そりなんですけど。

「俺あ、誰かと付き合つのは初めてなんだよーどうりやいいのか
わつぱり分からん」

「だあかあらあ! わたしが色々教えてあげるから! わたしだって経
験無いけど、毎晩毎晩イメージトレーニングだけは欠かさないんだ
から!」

「一言づのは初めて同士がやつても、大抵碌なことにならないと思
うんだけどな…。」

「そんな事はこの際ナシよーナシーとにかく頑張ればいいのよー。」

「いや、精神論じやビリもなうねえからー。具体案を考えよつー。」

「具体案つてなことよー、エロ本でも見ながら、本の通りこせつてみるとか?」

「女の子がエロ本だなんて…」

「しつこーーー!」

「うーむ、しかしあうなると…。

「エロ本を買ひにいなければならぬのか…?」

「うーん、そうちもねえ…、龍也くん家、男の子の家なのに、何故かエロ本置いてないし」

「俺はエロ本など手に取つたことはあつません、魂が穢れるからね…。

「そんなこと言つてるからウブなネンネみたいに育つつけやつのよーーー!」

「お前だつて生娘だらうが」

「わたしはひいのよ、性に開放的だから

「高校生が性に開放的とか言ひなや」

「ま、といあえず、わたしたちの第一歩のために、エロ本調達に行
あましょーー」

な、何故そんな話に！？

「だつて、龍也くんには少し変態になつてもらわない」と

「いやいや、知識を仕入れるだけで良いんだろー!? ほ、ほら、保健の教科書とか読めば…」

「それじゃあ面白くないでしょーがー。」

「ひ、ひいつ！？」

「ほらほらあー！ グズグズしないでわっせと出掛けよー！」

かねかねと云はれていいく俺だった。

着いた先は、コンビニだった。

のつしのつしと歩く雪音の後ろについて、中に入っていく。

雪音が向かっている先は、

「成人向け雑誌コーナー」

俺は回れ右、一目散に外へと駆ける！

「…逃がすかあ…」

雪音（般若バージョン）が俺の服の襟をつかんでいた。

「もう…、逃げられないのか…」

親猫に首筋を噛まれて連れて行かれる子猫のよつこ、俺は哀れ、雪音に引っ張られていくのだった。

「ほい、とーちゃん！」

無駄に嬉しそうな雪音の声色。

恐る恐る前を見ると、

「い、いやあああああ…！」

「ほり！恥ずかしがらない…！」

「ひ、ひひひ…」

雪音にあやされつつ、成人向け雑誌を吟味する。

「ねーねー、いろんなのどお?」

「うへん」

「——こののもやつてみたいよねーっ！」

「...ん」

カツブルで工口本を読んでいる状況というのは、いささか奇妙な風景である。
案の定、コンギーの密ひいろか、店員さんまでこいつを見ている始末。

「もう耐えらんない……、適当な何冊か買って帰ろう。」

「うんっ！ わかつたーあ！」

雪音が何冊か雑誌を引つつかみ、レジへ駆けていく。

「はあ

「龍也くーん！お金お金！」

「うん？ はいはい…」

店員さんに不思議そうな眼で見送られながらも、俺たちはこの魔城から脱出したのだった。

いやー、H口本買つなんて初めてだ。

貴重な体験させてもらつたぞ。

しかし、もつー一度どぐめんだけな…。

Chapter : 17 悪魔の「ハロー」（後編）

乱筆乱文誠に失礼。

本当に申し訳ありません…。

僕、受験生なもので、この頃PCさえも使えないんです…。
ところと、これからもだいぶ遅れてしまつと思いますが、どう
ぞ、首を長くして待つてください。

Chapter : 18 優しい帰り道

「ふふん、ふふふん、ふふふうんふー」

エロ本買った帰り道。

雪音はやけに上機嫌なのだつた。

「これでえー、龍也くんとおー、×××とか×××が出来るのー

あまりにも不純な鼻歌だつた。

ていうか、大通りでそんな歌、歌うつなよな……。

「あのなあ、そんな本買つたつて、直ぐに俺がその気になると思つたら大間違いだぞ？」

「うんー、……へ？」

コイツ、家に帰つたらイケナイお遊びをする気満々だつたんだろうな……。

幸せ妄想に水を差してしまつたか?

もう見てくれよ雪音の顔。

言葉じや言こ表せないくらいの絶望的表情。

見てるこいつが哀れになつてしまつよつた姿であつた……。

「可哀相だと思つなら相手してよー。」

「それとこれとは話が全く別だ、俺はやつぱり気が乗らない」

「なんどよー?せつかく夢いつぱいの未来予想図展開してたのにい

「！」

それは夢とこゝうのだらうか？

かなりの勢いで「チッ」とマッシュな雰囲気をかもし出す言葉だった。

「大体、俺の家には」のはと躊躇がいるんだからさあ……」

「そんなの、ホテルに行けば良いだけの話じゃなー。」

「うん？……な、なに？？」

ホ、ホテルだとう……？

「そ、それは無理だ！…といあえず値段の相場が分からん！」

「つっせごーーお金持ちのくせして！…しかも、わたし知ってるんだからー夜中に龍也くん、バイトに行つてるでしょ」

「…………」

「な、何故バレヒー……？」

ちやんと毎回、寝ているのを確認してから家を出でてる筈なの……。

「ちやんと知つてるよー、毎日一時頃からバイトしてんのー」

「何で知つてんだ？お前ら、毎日ぐりすり寝てるじゃないかー。」

「それは、龍也くんの家には隠しカメラが付いてるからだよ。」

「あ、ササマンなど」と笑い

「ま、待て待て。…それは本当の話か？」

「うん、ワビングからお風呂、果てはトラインの中までぱちり…」

「があああああああああああつ…!…?」

プライバシー…!

俺のプライバシーは何処へーーつ…?

「大丈夫だよー？他の人たちには見せてないからー、えへへ」

「そういう問題じゃねえだらうー？直ぐに取り外せ…」

警察呼ぶぞ警察…!

「それはダメだよー？取り外しちゃつたら、わたしは今日から毎日やつて龍也くんでいやらしい妄想をすればいいのか…」

「そんな習慣は必要ね…!…!…」

ていうか、何、こいつ、俺のトラインとか普通に見てたのか…？

「うそ…、龍也くん、オトコらしモノをお持ひで…」

「いやあああああ…!…」

「…こんな…、生き恥以外の何物でもないよつなことが…。」

「もういい…、俺がバカだつたんだ…死ぬしかない、もう…死ぬし

かない！」

いいんだ、どうせ俺なんか…。

」のまま雪音たちに全てを榨取されて死んでいく運命なんだ…。

「あ…、死兆星が見える……いや、最早なんにも見えねえ

「だ、大丈夫？ 龍也くん…、セーモードブルーになるとは思わなかつたから…」

「これがブルーにならぬといられるか…」

あ…、少しでも雪音に癒された俺がバカだったなあ。

「あーあ、人間つて、生きてる意味あるのかなー」

「龍也くんが、無気力過ぎて最初の状態に戻りつつある…？」

「もーいいよ、何もかもなかつた事にしてくれ…。俺は雪音とな出会わなかつた、それでいいな…？」

「だ、だめだよ…せつかく付き合つたんだから…つて、ちよつと待つて…置いてかないで…」

俺の肩に手をかける雪音。

「…はい？あの、どうひらひらまでしようか？」

「忘れられてる———.?」

「すいません、急いでるんで…」

「あ、待つて待つて…」

……む?

心なしか、雪音の声に涙声が混じってるような気が…?

「……う、ううええん…」

な、泣いた、雪音が泣いた…。

俺が、…泣かせてしまつたー?

案の定、後ろを振り向いて見ると、道路の真ん中で座り込み、大泣きしていた。

「、これはヤバイ。
かなりますい。」

俺が泣かせておきながら、こんな状況になつちまつとな。

「……」

しかし、気まぐさより先に、雪音への愛しさが先に立つ。

「…嘘だよ、」めんな

「ふええ?」

俺は無言で雪音を抱きしめる。

これくらいしか思いつかないからな。

「俺が雪音を心の支えにしてるんだ、忘れるわけ、ないだろ?」

「龍也くさ、つよひへせり…」

優しく頭を撫でる。

「ずっと離れないからな、永遠に一緒だからな…」

道の真ん中でこんなことするのもかなづかしいが、雪面には伏せられなー。

雪面の額に軽くキスをして、やつくつたたせる。

「あ、帰らひせ? みんな待つてる」

「うそ…、ありがと…」

今回俺が悪いわけじゃなかつたが、雪面を悲しませたままでこるのは寝覚めが悪い。

「の」と、俺はずっと雪面の心地よい笑顔でいた。やがて彼女はおひれられた

だった。

Chapter : 18 優しい帰り道（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

なんていうんですか、寂しいです。

僕にも恋人はいますが、こんなスイートは夢のまた夢です……。

というのは置いといて、感想を書いてくれる人が全然いないんですね……。

お願いします！感想プリーズ！

これでは僕は、何を糧にして小説を書いてゆけばいいのかと！

毎回感想ページを開いて、とてもがっかりするんですね……。

お願いしますー！

Chapter : 19 激闘（前書き）

入試終わったーあ！

そんなこんなで愛しの我が家。

何事もなく（まあ、色々あつたんだけれども）、無問題で帰宅した。

「はあ～あ……」

ずっと雪音はこんな感じだった。

その後、しばらくは納得しておとなしくしていたんだが、五分くらい経った途端暴れだしたのだった。

道の真ん中で、卑猥な言葉を叫びまくる雪音は、ある意味閻魔大王よりも恐ろしい形相をしていたのは、言つまでもない。

それから、頑張って雪音をあやし、家まで引っ張ってきたのだが…。

「はあ～あ……」

ずっとこの調子なのだった。

雪音が激しく放っている不幸に慄き、このはや躊躇も近寄れないでいる様だ。

ものすごい、他から見れば哀れに映るのだろうが、事情を知つていい俺は、心配をする」とも、増してや優しい言葉をかけることもしない。

その状況を見た一人が、

「もしかして、喧嘩しちゃつたんですかあ？」

「へええ！？お一人が喧嘩だなんて！！」

こんな風に勘違いをしてしまつのも無理はない。
そろそろ、何か声をかけてやる必要があるかな……？

「なあ、雪哉…こつまでもむくれてんなよ」

「…………むくれてないもん」

「やつせそんなことを言つて思つていた俺は、必殺の言葉を口にする。

「雪姫と一緒に……さつき覗いてきた本、読みたいな？」

ほらなあ、一撃必殺技だ。

とことことで、勢いのままにいつてしまつた事で、本当に一緒に工口本を読まなくてはいけなくなつてしまつた俺。
こつからは地獄だ。

「うふふー、見てみてえ…これが×××××だよお。龍也くんにも
してあげるからねー！」

רַבָּתְךָ יְהוָה אֱלֹהֵינוּ וְאֶת-נַפְשָׁךָ תִּשְׁמַח

早くもギブアップの兆しが出てきた俺。

くそう！恥ずかしくもいやらしいことを、そんな臆面もなくう……！

「それでねえー、これが…」

「すいません」「めんなさい」「もうしません!」

俺ギブアップ。

早
つ
！
！

「もおだめだあ……、助けてくれえ、俺には無理だあ……」

厳しいって！これは厳しいって！！

備考半泣き目状態

「なんか、龍也くんのキャラクター、だんだん軟化していくよね、最初の頃は思春期のピュアボーイのように、尖ったこと言ってたのに……」

「それは昔のことだ！今の俺は思春期じゃないピュアボーイなんだ！そのように扱ってくれえっ！」

「龍也くん……、生きる意味を教えてあげるよ……それは……子孫の繁栄だあつ……」

「花火」――

「これで、男にもセクハラは通用する」ということを教えてやりたい

「ちよつとお！龍也先輩になにやつてるんですかあつ！」

おおつ、力強い加勢だつ！

「お前ら、助けてくれつ、俺の貞操がピンチだ！」

しかし、俺はすっかり失念していた。

こいつらも、こと俺への執着心については、雪音に負けていないと
いうことをつ！――

「雪音せんぱーい！あたしも仲間にいれてくださいー！」

「わ、私も！わたしもお願いします！」

雪音に新しい仲間が加わり、敵勢はパワーを増した様だった。

……！」

「逃げるしかねえ……！」

敵の勢いが増加した今、まともにぶつかるのは自殺行為に等しい。
俺は、三人に背を向けると、一田散に玄関を田指して駆け出す。

「まつ、待ちなさいよつ――！」

「待つわけねえだろ！」

一心不乱に玄関田指して駆ける。
しかし、

ビタンッ！――

「ふぐえつ！」

何かが足に引っかかり、勢い良く転んでしまった…。

足を見ると、掃除機のコードが絡み付いていた。

「コードの先じゃ……」

「雪面へー。お前なんかい」としゃがる。頭打つたひびのあるつもりだ
打たなかつたから良一じやんー。龍也くんが逃げるのが悪いんだよ
！」

「誰だつて逃げるわ馬鹿野郎ー。」

「龍也先輩、往生際が悪すぎですわー。」

「セツですかうです！ 神妙にお繩につこしてくだせー。」

じつじつと迫りくる女軍団。

逃げるためにコードを解こうとするが、

「うわー!? 何でこんなに素晴らしこmodoに絡まつてるんだー。?」

「ふつふーん、こんなこともあらつかと練習しついたんだー。」

「無駄な努力すなー！」

「コードを引っ張つて、俺を手繩り寄せの雪面。
ずくずくするとフイッシュングされる俺。

「よーし、龍也くん、キーッチー！」

「あーんど、りつーす？」

「しないよつ！」

可愛い感じで見上げてみても、雪音の心に火をつけるだけだった。

俺、今度こそ絶体絶命！？

全員が、俺の服を脱がしにかかる。

そのときつー！

「ちわーす、宅急便でーす」

なんと宅急便が！

てか、何でインターホン押さなかつたんだ？

「た、助けてくださいー！」

「じーじーとばかりに叫ぶ俺。

「ど、どひしたんスか！今助けにいくつす！」

ナイス宅急便！

爽やか系おにーさんが玄関に入つてくる。

そして、足を止めて啞然とする。

半裸で倒れている俺。

足には掃除機のコードが巻きついている。

俺に巻きついている女三人。

ふと視線をそらせば、リビングの机に置いてある、開きっぱなしのエロ本。

「……ああ、新手のプレイっすね」

宅急便のおにーさんは、遠い眼をした後、荷物を置いて去つていった。

何か大切なものを失つた氣がする。
なんだろうか、この虚無感。

「はあ…、もう向でも良こや」

「おお、龍也くんが投げやつモードにー?」

「もつ好きにしてよ…、抵抗しないからや…」

あれ、なんだか、涙が止まらないこや。

「「」、「」めんて龍也くんー泣かないで泣かないでーほーら、よしよ
し」

「泣いてなんかないよ…、泣いて…なんか…」

そして、泣き声を上げながら雪音の胸に飛び込む。

よし、今回は難を逃れた感じだな。
我ながらずる賢い…。

だが、今回は煙に撒けたものの、次からどうなるか分からない。
真剣に対策を練るようになないと、危険だな…。

Chapter : 19 激闘（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

やっと入試が終わりました！

志望校に合格できたので、心にも時間にも余裕ができましたので、

これからは更新日時を短縮できると思います！

待つていてくださった皆様、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205d/>

I with...

2010年10月13日21時10分発行